湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学

薬学部・医療薬学科

殿山　泰弘

作成日　**2026** 年 **5** 月 **29** 日

1.　教育の責任

私が所属している湘南医療大学・薬学部・医療薬学科は、「臨床に強い薬剤師を育てる」を目標としている。私はそこで薬学基礎科目である生物学を専門とする教員として実習センターの専任教員として学内における学生実習を安全かつ円滑に進めるために実習スケジュール作成・機器の管理に従事している。また、講義においては、科目責任者として生物系実習、担当者として生物系基礎科学、生化学 I～IV、生化学実習、微生物学実習、早期臨床体験実習、後期臨床体験実習、医療薬学チュートリアル演習、薬学総合プレ研究、薬局実務実習、卒業研究 I、卒業研究 II、総合演習 I・II を担当している。薬学部では、実習を通じて、生物学・生化学の基礎知識だけでなく、自ら情報を取得して分析し結論を出す研究マインドを醸成させることが求められている。加えて、看護学科およびリハビリテーション学科からなる保健医療学部では、科目責任者として生物学の講義を担当している。この講義においては、医学・薬学に関連する知識を理解するための生物学の基本的知識を習得させることが求められている。

2.　私の理念・目的

1)　私の理念

大学は、知識・理論と実社会との架け橋となる場である。理論・知識の暗記のみに執心することなく、それらが実社会でどのように応用されているかを理解しなければ、実学である薬学の教育は完結しないと考えている。その際、知識・理論が社会をどのように変化させたのかを歴史の観点から見直すことも重要であろう。そして、習得した知識や理論を活かして、臨床現場での問題を解決する能力を身につけさせることが重要である。科目を問わず、全ての知識は有機的につながっていることから、教養科目も含めて幅広い知識の習得に努めることが重要である。そのうえで、自らが感じた疑問を自身で文献を調査し、仮説をたてて、実験や行動により検証の科学的手法により問題を解決する能力を持つべきである。薬剤師の社会における活躍の場は広がりつつあり、それに見合った知識や技術をさらに身につける必要がある。これからの薬剤師は、疾患に関する知識を有し、処方提案ができなければならない。そのため、薬剤師をはじめとする医療人は、生涯を通じて勉強する方法論や習慣を身につける必要がある。

近年はインターネットや SNS で簡単に文献や知識が手に入る。大学教育は、知識を得ることよりもそれをどのように使うかに重点を置く必要がある。大学でしか学べないことの一つに他者との相互作用を通じて知識や理論を活用することがある。この活動は、臨床現場で、患者だけでなく多職種との連携にもつながる。この状況下において、能動的学修態度を育てること、学生との信頼関係を築いて学修意欲を高く維持することが教員の役割であると考えている。また、学修方法については、記憶への定着のための反復学修と学修習慣を身につけさせることを重視している。

2)　理念をもつに至った背景

私は、大学教育において知識や理論と実社会との関係を理解させることを重視している。その背景には、私自身が歴史に強い関心を持ち、学生時代の学修を通じて、分野を問わず様々な知識が相互に関連し合っていることを実感してきた経験がある。時代や社会が変化しても、人間や社会が抱える本質的な課題には共通する側面が存在する。そのため、歴史的な視点を持ちながら社会を俯瞰的に捉えることは、将来の社会の変化を考え、自らが果たすべき役割を見出す上で重要であると考えている。

薬学教育においても同様である。近年、薬剤師には従来の調剤業務に加え、患者への服薬支援や健康相談、多職種連携など、より対人的かつ包括的な役割が求められている。文部科学省が掲げる「対物業務から対人業務へ」という方向性のもと、薬剤師は地域住民の健康と福祉を支える専門職として、その役割を拡大している。このような変化に対応するためには、専門知識の修得だけでなく、多様な背景を持つ患者や医療従事者と協働するためのコミュニケーション能力や問題解決能力を育成することが重要である。私自身、薬局勤務の経験を通じてこうした職能拡大の必要性を実感しており、その実現に向けた教育のあり方を常に意識している。また、インターネットや SNS の発達により、学生は容易に知識へアクセスできるようになった。場合によっては、特定のテーマに関して学生が教員以上の最新情報を収集していることもある。このような環境の変化により、教員に求められる役割も変化していると考えている。

私は、アカデミズムとは知識を共有し、新たな知見を創出するための対話と探究の営みであると捉えている。そのため、教員が一方的に知識を伝達するだけでなく、学生と知識を共有した上で対話を行い、その知識をどのように活用し、問題解決につなげるかを共に考えることが重要である。さらに、自身の学修経験やチューター活動を通じて、学修成果を高めるためには、学修への動機付け、学びやすい環境の整備、そして継続的な反復学習が重要であることを実感してきた。その基盤となるのが教員と学生との信頼関係である。私は、学生との対話を重視しながら信頼関係を構築し、主体的な学びを支援する教育を実践したいと考えている。

3.　教育の方法・戦略

講義構成の工夫

講義や実習の設計においては、学生が知識を体系的に理解できるよう、ストーリー性を重視した構成を心がけている。特に、1 回の講義で扱う主要なトピックを 3 つ程度に絞り、学習内容を整理することで、学生が重要事項を明確に把握できるよう工夫している。また、講義中には確認問題を取り入れ、理解度を確認しながら授業を進めている。授業開始時にはアンケートを実施し、高校での履修状況や既有知識の程度を把握することで、学生の実態に応じた授業設計に努めている。さらに、次回講義時に小テストを実施し、知識の定着状況を確認するとともに、自由記述欄を設けて授業に対する意見や要望を収集している。学生から寄せられた意見については可能な限り迅速に対応し、その結果を学生へフィードバックすることで、継続的な授業改善と学生との信頼関係の構築につなげている。また、知識や理論の説明にとどまらず、それらが実社会においてどのように活用され、社会にどのような影響を与えているのかを具体例とともに紹介することを重視している。加えて、講義の導入とまとめを明確にするとともに、前後の講義内容との関連性を意識的に示すことで、学習内容を断片的な知識ではなく体系的な理解へと結び付けられるよう努めている。

少人数からなる対話形式による学修の場を作る【チューター活動の充実】

現在、2 名のチューター教員で 11 名の 3 年生を担当している。学生の主体的な学修を支援し、教員との信頼関係を構築することを目的として、1 年次から生物学の勉強会を開催し、学生とともに学ぶ機会を設けてきた。勉強会では、科目担当教員とも連携しながら講義内容の補足説明を行うとともに、学修した知識や理論が実社会でどのように活用されているかについても紹介し、学生の学習意欲や知的好奇心を高めることを意識している。また、欠単位が多い学生や学修に困難を抱える学生に対しては、定期試験前に自習室でともに学習するなど、個別の学修支援を行っている。その際には、単に指導を行うのではなく、自身も同じ空間で作業を行いながら学ぶ姿勢を示すことで、学生が集中して学修に取り組める環境づくりを心がけている。私はこのような支援を、マラソンにおける伴走者のような役割であると考えており、学生の隣で歩みながら、それぞれの目標達成を支援することを大切にしている。

新しい実習教材の開発

より高い教育効果が得られる実習課題や材料の調査や開発を行っている。

4.　学習成果

保健医療学部　生物学

毎回の講義資料に 10 問程度の問題を記載しておき、復習のための課題として学生に問題を解くように伝えていた。そして、次回の講義の際に復習問題の類題を含めた小テストを実施していた。この小テスト実施については広い講義範囲の中から学生にポイントを伝える上でとて

も役に立ったと考えている。本科目は複数の教員によるオムニバス形式をとっているが、自分の担当のところだけでなく、全ての回での小テスト実施を提案する。
講義ごとの小テスト実施については、「範囲が広いから小テストをしてくれた方がどこが重要かわかる！」など好評であった。講義で伝えきれなかった補足なども解説の際に話せるので、今後も継続する。

薬学部　生物系実習（評定点：75.19）
授業評価アンケートの自由記述では以下のコメントがあり、一定の評価を得ている。

- ✓ 授業の雰囲気がとても良かった
- ✓ 質問やチェックを受けるときにアドバイスや特徴をたくさん話してくれた事です。細胞に対して理解が深まりました。
- ✓ 説明内容は分かりやすいところが多く実習を スムーズに進めることができました。

5.　改善のための努力
授業評価アンケートに基づいた講義・実習の改善
講義最終日の授業アンケートに加えて、小テストに講義についての要望を学生が記載できるよう自由記述欄を設けて、毎講義ごとに学生からの要望を聞き取っている。これらの学生からのコメントを真摯に受け止め、講義資料や板書などの分かりにくい部分を適宜修正している。また、実習の操作説明は、動画を多用するなどして実際の操作の理解を促している。

6. 講義・実習へのアクティブラーニング導入
現在、保健医療学部の生物学の講義において、アクティブラーニングの手法を導入している。従来の知識を網羅的に教授する講義では、学生が学習内容を十分に消化できず、必ずしも学習成果の向上につながらないという課題を感じていた。そのため、講義内容を精選するとともに、学生が自ら考え、議論し、知識を活用する機会を設けることを目的として、アクティブラーニングを取り入れた授業設計を行った。
具体的には、全 15 回の講義を 5 つの章に分け、各章を 3 回構成とした。そのうち 2 回を講義形式、1 回をアクティブラーニング形式としている。アクティブラーニングでは、学生を 2〜4 名のグループに分け、講義で扱った知識や理論が社会に与えた影響や実社会での応用例に関する課題について調査および意見交換を行わせている。その後、各グループで意見をまとめて発表を行い、教員はそれらの意見を分類・整理した上でフィードバックを行う。最後に教員が論点を整理し、学術的な観点から補足説明を加えることで学習内容の定着を図っている。
このような授業設計により、知識の暗記にとどまらず、学習内容を社会との関わりの中で理解し、多面的に考察する力を育成することを目指している。

7.　今後の目標

短期目標

1.講義・実習へのアクティブラーニングの実践と改善（2026 年度前期）

講義形式で伝える重要項目を厳選して絞ることでアクティブラーニングのための講義時間を確保して、対話形式の講義を実践しつつ、内容を改善していく。

2.新しい実習教材を用いた実習の実践（2026 年度後期）

メダカを教材として薬学教育に適した実習内容を新たに作成し、生物系実習で実践する。

長期目標

講義・実習およびチューターによる学修支援を通して蓄積された成績データを様々な観点から統計学的に解析することで、自身の試みの教育効果を評価する。さらに、その結果に基づいて自身の講義・実習を改善し、より効果的な講義スタイルの確立を目指したい。

【添付資料】

1. 湘南医療大学 2026 年度シラバス
2. 第8回日本薬学教育学会　発表要旨
3. 2025 年度　保健医療学部　生物学　授業評価アンケート
4. 2025 年度　生物系実習　授業評価アンケート